

科学研究費助成事業（基盤研究（S））中間評価

課題番号	19H05591	研究期間	令和元(2019)年度 ～令和5(2023)年度
研究課題名	社会性の起原と進化：人類学と霊長類学の協働に基づく人類進化理論の新開拓	研究代表者 (所属・職) (令和3年3月現在)	河合 香吏 (東京外国語大学・アジア・アフリカ言語文化研究所・教授)

【令和3(2021)年度 中間評価結果】

評価	評価基準	
	A+	想定を超える研究の進展があり、期待以上の成果が見込まれる
○	A	順調に研究が進展しており、期待どおりの成果が見込まれる
	A-	概ね順調に研究が進展しており、一定の成果が見込まれるが、一部に遅れ等が認められるため、今後努力が必要である
	B	研究が遅れており、今後一層の努力が必要である
	C	研究が遅れ、研究成果が見込まれないため、研究経費の減額又は研究の中止が適当である
(研究の概要)		
<p>本研究は、人間社会の多様性ではなく、人類に共通する「社会性」の起源と進化を人類学と霊長類学が連携し、関連領域の知見を取り込みながら、さらにフィールド調査のデータと理論の往還を通して探求する挑戦的なテーマであり、研究代表者が過去13年間に主催してきた多数の研究会やシンポジウムにおける学際的対話を基礎とする研究である。</p>		
(意見等)		
<p>新型コロナウイルス感染症の影響により、本研究で計画されていたフィールド調査はほとんど実現できていないが、本研究のコアである人類学と霊長類学の対話について順調に進展があるため、現時点で期待どおりの成果が見込まれると評価できる。</p> <p>異なる分野が、比較可能な同質・同量のデータをフィールドで収集することは困難であるため、人類学と霊長類学の密な対話が不可欠であり、これまでに実施された18回の研究集会は相互理解を深める試みとして高く評価できる。また、議論の進展はウェブ公開され、議論の到達点として書籍の出版計画が進行中であり、参画者による研究成果の公開も着実に進んでいる。</p> <p>研究計画調書には、社会性の創発に関与するものとして、行為側面（依存—支援、離合集散、対立）と構造的側面（両性間関係、世代間関係、社会集団の重層性）が掲げられていたが、これらの概念の共有可能性がどのように議論されたのか明確ではない。インタビュー調査ができない霊長類学と同質のデータ収集を目指すのであれば、個人間相互行為の経時的文脈や行為主体の主観・経験の把握に資する非言語的情報の種類を、調査経験から人類学側が洗い出し、その共有可能性を議論する必要があるところ、本研究では異分野間の連携のために、研究関心や概念をすり合わせる試みにも積極的に取り組んでいる。その対話と再開予定のフィールドワークを通して、個体追跡法による質的データ収集の具体的な設計が前進することを今後期待する。</p>		